

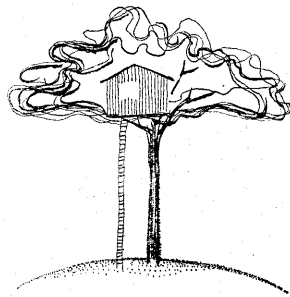
珍竹林を育てる話

河合雅雄

キンメイチク（金明竹）という竹がある。稈（かん。竹の茎のこと）に黄金色の縞模様が入った珍しい竹である。地の青に縦縞が入ったものや、節ごと青と黄金色が交互に現れるという不思議な稈をもったものもある。こういう竹藪の中に入ると、貴品のある美しさに思わず立ちつくしてしまふだろう。キンメイチクは、マダケの突然変異である。石川県にあるものは、葉っぱまでが黄色がかっていて、

匂い立つ若竹のようなあでやかさがあり、天然記念物に指定されている。ところが、一斉開花による枯死の危機に見舞われた。マダケは周期一二〇年で、全世界の竹がほとんど同時に花を咲かせ、結実した後一斉に枯死する。日本から移植されたマダケは、イングランドやソ連でも、同時に開花結実し、一斉枯死した。

これは遺伝子にプログラムされた体内時計の仕掛



によるものだが、天然記念物の黄金の竹も、種の運命に従ったのである。

文化財担当者は仰天し、移植したり客土を入れたりして、恢復に懸命の努力を行った。客土した所の竹は恢復して筍が出てきたが、皮が落ちると凡庸な青竹ばかりが姿を現し、黄金の竹は消え失せていた。

その中で、ただ一本だけキンメイチクが発見され、移植して大事に育てられて十数稔に増加した。ところが、最近繁殖が思わしくなく、元気がない。どうすればいいだろう、という話題が天然記念物保護審議会に提出された。

「手入れをするから、だめなんですよ」

植物生態学のN博士が、にこにこしながら一発できめつけられた。

「草をぬいたんでっしゃる。そんなことしたら、すぐ枯れまっせ」

アンギラスの異名をもつ博識のS林学博士が、追

いうちをかけた。

つまり、大事にしすぎるあまりに、除草をして肥料を与えたのがいけない、というのである。原産地が青竹林になったのも、客土を入れて施肥をしたのが原因だという。

キンメイチクという珍種は、虚弱体質なので、肥料を与えすぎるとうけつけることができず、返ってだめになる。雑草は竹の養分を横取りするから除いた方がいいと考えがちだが、強い日光から根を守り、水の蒸散を防ぎ、有用な土壌動物の保護に役立っているから、除草すると竹は弱ってしまうのである。

「過保護はいけません」「自然のままがいいんです。放っとくことですか」委員の先生は口々にそう言っているうちに、いつしか教育談議になった。過度な人工環境の中におかれ、「内なる自然」を抑圧されている子どもたちの教育に、雑草の大切さを教えてくれる。今の教育は、雑草の除去に熱心すぎてるか

らだ。

「珍竹林を育てるように子どもを育てんと、ちんちくりんな子ができますよ」と私はつぶやき、「そのうち、子どもたちは一斉にしぼんだ花を咲かせ、一斉枯死しまっせ」と脅しをかけた。「ほんまにせやねん」と、アンギラス先生は苦笑いをして虚空を睨まれた。

これに類した話が、もう一つあった。徳島県山川町にランツツジの自然群落がある。樹齢数百年、高さ六メートルに及ぶツツジが、約五ヘクタールもの面積に群生している。開花時の写真を見ると、桜の林かと思まがうばかりの豊麗さに輝いていた。

地元の人が保存しようとして、大木になるカエデを伐り、アセビを引きぬいた。ところが、その後にかやなどが茂ってランツツジが圧迫され、衰弱しはじめたというのである。

珍竹林の賢人たちによると、やはり「いらんことをするから、だめになる」のだそうである。ランツツジは岩地に生えているので、カエデなどは放っておいても大きくなりっこはない。また、アセビは根から有毒物質を出し（アレロパシーという）、かやなどの有害植物の繁茂を防いでくれている。だから、アセビは除去してはいけないのである。

また、がやがやと雑談に花が咲いた。「わしら、子どものときは悪いことばかりしましたぜ」とS博士。「毒も必要ですね」端正で行儀のよいY先生が、にこりともせずおっしゃる。みんな、味のある毒を発散しながら、自分も周囲も見事に育ててきた、ということなのだろう。その故か、みなさん天然記念物のような立派な顔をしてらっしゃると、無毒蛇の私は己の顔の貧しさを恥じたのであった。

(京都大学霊長類研究所)